

奉賛会講演集 第二輯

スライドで語る

世界に生きる

日本の心

名越二荒之助

—アジア鎮魂の旅から—

三重県護国神社奉賛会

三重県護国神社奉賛会主催
第二回公開講演会

スライドで語る

世界に生きる

日本の心

—アジア鎮魂の旅から—

高千穂商科
大学教授 名越二荒之助

昭和六十三年八月四日
於 三重県護国神社参集殿



三重県護国神社沿革

明治二年、津藩主藤堂高猷公が、安濃郡八幡神社境内に小祠を建て、戊辰の役で戦死した藩士の霊を祀る表忠社が御創祀であり、以来国難に殉ぜられた県出身御英霊の慰霊および安鎮と感謝の誠を捧げている。

明治七年官祭に列せられ、同四十二年、現在地に移築遷座する。

昭和十四年、三重県護国神社と改称。

天皇・皇后両陛下には、昭和五十年十月二十七日行幸啓遊ばされ、御親拝を賜った。

平成元年には、御創祀百二十年・御遷座八十年・御社名改称五十年を迎え、記念事業を行う。

三重県護国神社奉賛会主催
第二回公開講座
日本の心
...

目次

スライドで語る

世界に生きる日本の心

高千穂商科大学教授 名越 二荒之助

―アジア鎮魂の旅から―

講師略歴……………1頁

子供は神様からの授かりもの……………2頁

国旗・国家の意味を教えない例外の国……………6頁

親日国家パラオに生きる英霊の心……………10頁

日本の精神伝統の源流を教えるアメリカの教科書……………18頁

世界各国に生きる日露戦争と東郷平八郎……………25頁

戦争の責任は、日本と米・英のどちらにあったか……………39頁

支那事変は侵略戦争か……………45頁

忘れてならない日本の戦友、汪兆銘一門の最後……………49頁

インパール作戦の歴史的意義とチャンドラ・ボースの復権……………53頁

インドネシアに生きる大東亜戦争の遺産……………57頁

バリの父、三浦襄翁の自決……………61頁

マレーシアの元外務大臣、ガザリー氏……………64頁

―現地反日感情のカラクリ―……………67頁

―靖国精神が平和を守る―……………71頁

後記……………71頁



名越二荒之助先生 略歴

大正12年 岡山県に生まれる
 山口高商卒業後、入隊
 新京陸軍經理学校を経て、ソ連に5年間
 抑留
 復員後、岡山県で県立高校の社会科教諭、教頭
 昭和43年 家永教科書裁判で国側証人
 昭和56年 参議院予算委員会の参考人として(教科
 書問題について)問題提起
 現在、高千穂商科大学教授
 (社会思想史・社会科教育法)
 徳山大学客員教授

主な著書 『大東亜戦争を見直そう』『新世紀の宝
 庫・日本』『戦後教育の避けてきたもの』『反日
 国家・日本』『ドキュメント世界に生きる日本の
 心』『アジアに生きる大東亜戦争』等

スライドで語る

世界に生きる日本の心

ーアジア鎮魂の旅からー

高千穂商科大学教授 名越 二荒之助

子供は神様からの授かりもの

只今、身に余るご紹介をいただき、本日は意義ある会にお招きいただきまして光栄
 に思い感激している者でございます。

今控室におりましたら、英霊にこたえる会三重県本部長から、私の名前が変わっている。その由来についてご質問がありました。少しふれさせていただきますと、これは本名でありまして、ペンネームではありません。私の父親が四十歳になっても子宝に恵まれず、日光の二荒山神社に、「男の子が生まれたら二荒之助、女の子が生まれたら二荒子ふたらこにいたします。」と願をかけて、父が四十三歳の時生まれたのが私なのです。小さい時から「おまえは神様からの授かりものだ」、「神様の申し子だ」といつて暗示をかけられながら大きくなってきました。しかし皆様、私だけでなく、日本人は元来、子供は神様からの授かりものだと思われ、今日に至っているのではないのでしょうか。子供が生まれ、お七夜になれば新しくつけた名前を神棚に供えて幸福を祈り、七五三や初詣には子供を連れて氏神様にお参りして成長をお祈りします。

これらは皆、神様からの授かりものと受けとめているからですが、戦後の教育はそ

のように教えておりません。子供はどうして生まれるのか、それはお父さんの精子とお母さんの卵子がこのようになって生まれるのだと、図解入りで教えている。ですからこんな教育を受けた者は、自分のルーツは精子と卵子、即ちアメーバの生まれ変わりのような受け取り方しかできなくなる。「神様の授かりもの」と、「アメーバの生まれ変わり」と、どちらの方が格が上かといえますと、わかりきっています。

戦後は「科学的」という言葉がはりました。科学の方法論はいろいろあるのに、自然科学の意味だけに理解し、精神科学の面をおろそかにしている。そもそも人間と他の動物との違いは何でしょうか？ 性教育に関連させていえば、「人間はパンツをはく動物」であり「結婚式をする動物」なのです。ではどうして人間はパンツをはくのですか？ またどうして人間は結婚式をするのですか？ 結婚式をする時には、今日も先程神前でお抜いを受けましたが、「掛けまくも畏き伊邪那岐大神」の大前でお

抜いを受けてからやるでしょう。結婚式の意義や、なぜ人間はパンツをはくのか？ 他の動物は性器を露出しているのに、人間はなぜその部分を隠すのか？ これは性の哲学に触れる根本的な問題です。そしてなぜ人間は結婚するまでは純潔を尊ばねばならないかというような、人間精神の本質に関することは教えず、自然科学的発想を優先してきました。「科学」は、精神科学と自然科学を調和しなければなりません。生命尊重をいうなら、他の動物と違う人間の尊厳性が教えられなければなりません。精子と卵子は教えても、純潔の尊さを教えなくなりました。

こういう傾向はかってソ連で流行した性の唯物論を思いだします。一九一七年に共産革命がおきた時に、コロンタイという女の学者が、性の唯物論を唱えました。性のコップ理論とかコロンタイズムとかいいまして、男と女を取り変えるのはコップを洗って使えばいいようなものだ、というような理論です。私が五年間ソ連に抑留された

頃も、このコップ理論が生きていたのか、ここでは申し上げられないような、人間が動物化した交尾場面を度々目撃しました。現在の日本にも性の唯物論が横行して、不倫の流行↓家庭の崩壊につながっているようです。教育の崩壊の遠因は、こういう処からもきていると指摘できます。

国旗・国歌の意味を教えない例外の国

今日はこんな話をするつもりではなかったのですが、私の名前の由来を訊かれましたので、ついこんな前置きから入ることになりました。「一事が万事」といわれます。戦後日本人は、人間のあるべき本質のみならず、国家として大切な基本問題を忘れておるのではありますまいか。

先日、私の研究室に「先生、質問していいですか。」と野球部の主将がやってきま

した。野球部の学生は練習が忙しくて授業にもなかなか出ないのですが。その学生が、「ちょっと恥ずかしいのですが、国旗の真中にある赤い丸は何ですか。後輩から訊かれても答えられなかったので、名越先生なら教えてもらえると行って来ました。」と訊くのです。私は「恥しがることはないよ。大人が教えなかったのだから。」と言ってその意味を教えてやりました。

戦後、日本の教科書には、日の丸や君が代の意味が書かれていなかったのですね。私は世界各国の教科書を調べておりますが、どの国だって国旗や国歌の意味は、小学校二・四・六年生というように何度も教えております。日本でも戦前は教えておりましたが、戦後は教えなくなりました。日の丸を掲げるかどうかを多数決で決める学校もある始末です。国旗の掲揚を多数決で決める国がどこにありますか。今日本では、日の丸の旗は戦争の旗だ、いや平和の旗だといって論争する人もおります。日の丸の旗

は戦争の旗ですよ、私も戦争に征く時には持っていき、日の丸の旗のもとに死を誓っていたものです。しかし、戦争の旗だけではなく平和の時にだって掲げますよ。日の丸の旗は戦争の旗でも平和の旗でもなく、また戦争の旗でも平和の旗でもあるのです。それでは何の旗かというところ、白地に赤く日の丸染めて、ああ美しや日本の旗は」と歌われている様に日本の旗なのです。日本のゆく処、戦争中であろうが平和時であろうが常に掲げるのが日の丸であり、それが国旗なのです。アメリカの星条旗でも、ソ連の赤旗でも皆そうであり、それが国旗というものなのです。それを、日の丸の旗は戦争の旗だ、いや平和の旗だといって論争するのは、愚かを通り越しているといわざるを得ません。

新日鉄の社員が海外へ出張すると、外国人から「日本の国旗は真中に赤い丸があるだけで簡単だが、あの丸は何か。」とよく訊かれるそうです。しかし、若い社員は教

えられていないので答えられない。そうすると外国人に、君はそれでも国際人か、と笑われ恥をかくそうです。それで新日鉄が慌てて作ったのが『日本―その姿と心―』（学生社刊）という本で、一冊千三百円で只今ロングセラーです。この本には、日の丸がなぜ国旗になったのか、天皇や、君が代の意味や、日本の国花・国鳥などを説明しております。それから元号です。明治・大正・昭和というように元号が今も使われているのは日本だけですが、どうして元号ができたのかという意味、また日本という国名のいわれ等、戦後日本の学校教育で教えなかった基本的な事ばかりをまとめて、一冊のポケットブックを作りました。外国人に訊かれたら、英語でこう答えるようにと和英対照で書かれています。

今日の私の講演は、私の作った幻燈（スライド）をお目になげながら進めていますので、ここに『日本―その姿と心―』という本の中味を映し出してお目にかけます。

親日国家・パラオ共和国に生きる英霊の心

只今国旗について話をしましたので、パラオの国旗についてご紹介させていただきます。御覧になればわかるように、日の丸と同じデザインです。パラオ共和国は、昭和五十六年一月に独立した国ですが、国旗を制定する際に、国民に募集したところ七十数点の秀作が集り、その中から決めたのがこの国旗です。太平洋の真中に位置しているので周囲が青地、そして中央の黄色い丸は満月を表わします。月は日出ずる国日本に照らされて輝くという意味で、日の丸が太陽を表わす日章旗とすれば、これは月章旗なのです。こういう国が現在あることを一般には知られていません。マスコミも書かないものですから、ご紹介するわけです。

この間も、元総理大臣の福田赳夫氏に、ビルマ取材の報告をしたことがあります。

最後にパラオ共和国の国旗を見せました。福田氏は「知らなかった。」と驚かれ、是非これを事務所に飾らせてもらうと云って大変喜ばれました。

日本の近隣諸国には、「教科書を書き直せ！ 奥野大臣を辞めさせろ！ 靖国神社には参拝するな！」というような、反日的な国家があります。しかしパラオ共和国は国旗からして親日的なのです。昭和六十一年十一月には、天皇陛下御在位六十年を奉祝して、日本の国旗とパラオの国旗を持って、提灯行列を行なっています。私はこの話を聞いた時すぐには信じられず、行列の写真を見せてもらって、初めて信じた次第です。どうして彼らはこのように親日的なのでしょうか。

彼らは第一次大戦後から約三十年間日本の信託統治下にありました。私が最近出版した『世界に生きる日本の心』にはパラオのことを書いていたので、大統領以下沢山の人々が読んでくれました。その中の一人で、今政府顧問をしているイナボ氏が、昭

和六十三年の四月二十六日に来日しました。彼は自分の娘と姪を連れて来ているのです。私は彼らと東京のホテルニューオータニで会いました。「どうしてこの時期に来日したのですか？」と訊いたら、「四月二十九日の天皇誕生日に陛下のご尊顔を遙かに拝みたい。自分はもう年をとったから、生きている間に一度皇居参賀をしたかった。」

ということです。私達有志は彼らを案内して皇居に出掛けました。天皇陛下がお出ましになられ、力の込もった元気なお声を拝聴する事ができました。私達は、日本の国旗とパラオの国旗を振りながら『天皇陛下万歳』を唱えました。その後、宮内庁の配島はいしま式部職にイナボ氏を紹介して、月章旗を謹呈しました。式部職は、「この国旗は陛下に是非お目にかけます。喜ばれるでしょう」と云っておられました。そして帰りに楠公さんの銅像に立ち寄り、靖国神社へ参拝しました。昇殿参拝後、イナボ氏を囲んで我々有志が集りました。イナボ氏は、「パラオ島を守ってくださった日本の兵隊さん

は皆言っていました、死んだら靖国神社に祀られるのだと。その靖国神社に参拝することができて……」そこまで言ったら泣き崩れてしまって言葉がつながらなかったのです。日本人以上に日本を忘れず、英霊が彼らの心の中に生きていますと思えました。

どうして彼らはこのように日本の事を忘れないのでしょうか。それには深い理由があります。昭和十九年九月、ペリリュー島を守っていた日本軍は一万二千名、アンガウル島の守備隊は二千名でした。そこへニミッツ率いるアメリカ太平洋艦隊の海兵隊六万名が、一挙に攻撃をしかけてきたのです。守備司令官中川男大佐（戦死して二階級特進、中将となる）は、その前に米軍が攻めて来ることを予知して、ペリリュー島民を全員パラオ本島に移そうとしたのです。ペリリュー島民は、日本の兵隊さんといっしょに我々の島を守りたいといいましたが、中川連隊長は強制的に移しました。日本軍一万二千名はペリリュー島を守りましたが、制海権・制空権無く、弾薬食糧の無

い中で、七十二日間持ち堪えて五十数人が生き残り、ついに「サクラサクラ」という六文字の電報を打ち、中川大佐以下三名が自決し、残る五十数名が群がる敵陣に切り込んで玉砕したのです。「サクラサクラ」という最後の六文字は、桜の如く散ってゆくという、もっとも簡潔な詩です。それを電文に託して玉砕したわけです。だから、ペリリュー島やアンガウル島に住むパラオの人達は、一万数千名の玉砕者のことを忘れることができないのです。

今スライドでご覧頂いている真中の人が、日本名オキヤマ・トヨミという方で、日本の教育を受けた人です。日本の若者がペリリュー島を訪ねると、このトヨミ女史はしみじみと話しかけます。「日本人は戦争に負けて僅か四十年しかたっていないのに、どうして日本の魂を失ってしまったのですか。」と。このトヨミ女史は教育勅語を正確に朗唱して、愛国行進曲を歌います。「ユダヤ人は二千年の亡国の中にあっても民族

の理想を失わなかったのに、日本人は僅か四十年で英霊の心を忘れてしまったのか。」
と云って日本人を叱るのです。日本の青年神職が訪れた時には、護国神社を造つてくれと頼んだそうです。そして、この青年神職を中心に組織された清流社（滑川裕二会長）が尽力して、ペリリュー島とアンガウル島に護国神社が創建されました。この写真
真は定礎式を行っているところで、日本とパラオの国旗が掲げてありますね。一万二千柱を祀る神社としては小さいかもしれませんが、こうして護国神社ができました。
それで、州会議員を始め島民が、次々二拝二拍手一拝の作法で玉串拝礼をしたのです。このことは、グアム島で発刊している「パシフィック・デイリー・ニュース」にものりま
した。この英字新聞には、神社がパラオに建立されたいきさつを紹介し、日本での祀り方や神道の解説まで書いてあります。

なお、ペリリュー神社には左右に絵馬があります。右の絵馬には、帝国海軍を徹底的に打ち破ったニミッツ太平洋艦隊司令長官の言葉が書いてあります。「この島を訪れる世界の人々よ、日本軍人は最後まで勇敢に戦った、この忠勇武烈なる働きを故郷に帰って伝えてほしい。」こういう文章で終わっています。戦後日本人が英霊を讃えないものですから、日本海軍を打ち破ったアメリカ太平洋艦隊のニミッツ元帥が讃えているのです。それに感動した石川県富来町の教育長をしている三谷博先生が、ニミッツのこの英文を、自分の庭に記念碑として建立しました。するとアメリカのニミッツセンターから感謝状が届きました。

このように、今も英霊の心、日本の心を忘れないパラオ共和国のような国があるのです。そういうパラオの誠意にこたえる日本人が少しでもいいのではないか。私はそう思って、国民の祝日には、家の前に日の丸とパラオの国旗をこの写真のように掲げ、彼らの真心にこたえることにしております。そこで私は「パラオを励ます会」

を作ったらどうであろうかと思ひまして、今一人でやっているんです。ここにパラオの国旗を沢山持ってきておりますから、皆様方このパラオの国旗を一枚千円で買ってください、芳名帳に住所と氏名を書いていただきたいのです。今年の十二月にパラオを訪問しますので、その時に「日本人の中にもパラオの人々の真心に感じている人達がこのようにおりました。」と、この芳名帳とお金を差し上げようと思っています。

今まで日本は経済繁栄ばかりを考えて、発展途上国には経済援助しか考えませんでした。心を輸出するとか、文化の交流をはかるという発想は乏しかったのです。この会場の入口にパラオの国旗と芳名帳がありますので、ご希望の方はパラオの国旗を持ち帰って、ご家庭のお子様やお孫さんに見せて伝えて下さい。日本では自分の国の国旗さえ掲げない国になってきましたが、一人でも多くの人々にパラオの国旗を見てもらえたらと思ひ、ついつい出過ぎたお願いをしたわけですが、なにとぞご協力をお願いいたします。

日本の精神伝統の源流を教えるアメリカの教科書

パラオの話で横道にそれたようですが、本題にかえりましょう。

私は冒頭、国旗や国歌の意味を教えないのは、世界では日本だけだと指摘しました。国旗や国歌の意味を教えず、国旗・国歌論争を今もやっている国ですから、他はおして知るべしです。日本は国家としての精神的中核を喪失しているのです。

このスクリーンに映し出したのは、今使われている小・中学校の古代史の部分です。戦後日本の教科書は、「邪馬台国」と「卑弥呼」が古代史の主役でした。「邪馬台国」というのは読んで字の如くに、^{よこしま}邪な馬の台の^{たい}国^{くに}、^い「卑弥呼」は^いい^いよ^い卑しい^いと呼ぶ^よ”という意味です。「紀元一世紀頃には邪馬台国があって、そこには卑弥呼と

いう女王がおりました。」といってシナ人が書いた『魏志倭人伝』という歴史書で日本の古代史を教えてきたのです。天照皇大御神や神武天皇を、戦後教えたことがありません。嘘のような本当の話です。NHKでも三月十一日ともなれば、邪馬台国・卑弥呼の番組を組んで、神武天皇を取り上げた事がない。日本の大新聞が二月十一日に神武天皇を取り上げたことがありますか。

私はシナと呼ぶのです。中国といえば、広島に中国新聞、岡山には中国銀行もあります。中国というのは、私の郷里の岡山県も含まれた中国地方のことです。今、中国といえば三つもあります。中共なのか、台湾なのか、中国地方なのか混乱します。また世界各国は皆、シナと呼んでいます。〃チャイナ〃とか〃チナ〃とか〃シーナ〃とか、スペイン語も英語もドイツ語やフランス語も皆そうであり、国際人ならシナと呼ぶのが普通です。そもそも、中華人民共和国は昭和二十四年にできた国です。それに

対し私の郷里の中国地方は、豊臣秀吉の中国征伐以前から使われていました。私の郷里にこそ先称権があるのです。(笑)

また横道にそれましたが、戦後は天照皇大御神も神武天皇も学校では教えなかった。『古事記』『日本書紀』に基づく歴史を教えず、シナ人が日本を小馬鹿にした歴史で今も教えております。それではアメリカの世界史の教科書は、日本の全体像をどう教えているかご紹介したいと思います。ここにスライドに映されたのは『アジア・アフリカ世界』と題する中等教育用の教科書です。この教科書は冒頭が「日出ずる国」です。「我々は日本のことを〃ジャパン〃と呼ぶが、どうしてそう呼ぶかというと、日本は昔から日出ずる国日の本の国といわれており、その日の本の国が日本といわれたところから、〃ジャパン〃と呼ぶのである。」と書いております。「日本」という国名の由来から書いているのです。私のゼミの学生にこれを翻訳させると、学生達は日本の

国名の由来がわかったと、アメリカの教科書に感謝していました。

続いて「神々の国」という見出しをつけて本文に移ります。本文は、「日本は神々の国である。伊邪那岐・伊邪那美命が国を生み、天照皇大御神を生み、その天照皇大御神の孫瓊杵命が、三種の神器を持って九州の一角高千穂の峰に降り立ち、瓊杵命の孫の神武天皇が、BC六百六十年二月十一日に建国された。」と建国記念の日の意義まで説き、「神武天皇から今上天皇に至るまで百二十四代万世一系、世界最古の王朝」と結んでいます。翻訳すれば六百字ですが、その中に国の形成過程が的確に書かれています。

この教科書は、お目にかけているように伊邪那岐・伊邪那美命の国生みの絵もせています。この絵は、いまボストン美術館にあります。私はこのアメリカの教科書の絵を見たことはありません。この絵を描いたのは誰であろうかと、東京の国立博物館に

教科書を持参しましたら、その山口調査室長も見たことがないというのです。その後、作者をいろいろ調べて貰いましたら、小林鮮斎永濯が、明治十七年頃に描いたとわかりました。この絵がどうしてボストン美術館にあるのか、調べてゆけば大変面白いのです。次々に面白い新事実を発見したので、NHKの『歴史探訪』で取り上げたらどうかと話しましたら、NHKでも「それは面白い、考えましょう。」といいましたが、まだやりません。伊邪那岐・伊邪那美命をやったら、皇国史観のレットルをはられることを怖れているのかもしれない。しかし皆様、日本の心を語るのに伊邪那岐・伊邪那美命から入らなければ、説明がつかないのです。ユダヤ教やキリスト教を語るのに、アダムとエヴァを抜きにすることができないようなものです。アメリカの教科書は、そのようなことをよく知っているから、我が国を形成した古代史の主役である伊邪那岐・伊邪那美命から、天照皇大御神、瓊杵命、神武天皇というように、

国家形成の主役を中心に語っているのです。勿論、邪馬台国や卑弥呼は書いていません。またアメリカの教科書は、どの教科書も「神道の起源」を教えています。神道は日本の精神伝統の原点を示すもので、自然崇拜と祖先信仰が創り上げたもの、というように書いております。だからアメリカの教科書を見れば、日本の国の起りから精神伝統まではっきりわかるのです。

又、アメリカの別の『歴史と生活』と題する教科書には、日本のある詩人は、日本の心を次の様に歌っているといつて、三重県・松阪市出身の国学者本居宣長の「敷島の大和心を人問はば 朝日ににほふ山桜花」の歌を紹介しています。この歌は戦前の教育を受けた者で知らない者がなく、戦後日本では一切教えたことがありません。この歌を、アメリカの教科書では教えているのです。さらに日本の国柄を示した歴史書として『神皇正統記』の冒頭の言葉、即ち「大日本ハ神国ナリ。天祖ハジメテ基ヲヒ

ラキ、日神ナガク統ヲ伝給フ。我國ノミ此事アリ。異朝ニハ其タグヒナシ。此故ニ神国ト云也」の文章を紹介しています。この教科書も、ボストン美術館にある伊邪那岐・伊邪那美命の国生み神話の絵をのせています。ついでに触れておきますが、この絵は世界の常識となっております。世界最古の百科辞典といわれる『ブリタニカ』にも、またアメリカの『ランダムハウス』という百科辞典や宗教専門書にものっており、この絵を知らないのは日本人だけかもしれません。

アメリカは日本を占領してから、「神道指令」を始め、我が国柄を破壊する工作を進めました。学校教育では、「実証できないことを教えるな」として、神話を否定してきました。そのアメリカですが、彼らは占領政策のことなどは忘れている。いや無視しているのかも知れませんが、占領政策の通りに日本を見たら、日本の本当の姿はわからないのです。それに彼らにはタブーがないから、大らかに日本を語っています。

あまりにも日本をよく知っているので、種本たねほんは何だろうかと調べたのですが、どうやらチェンバレンの『英訳・古事記』や、アトソンの『英訳・日本紀』『日本文学史』のようです。特にアトソンの『日本文学史』は活用されています。いずれにしてもアングロサクソンは大きなスケールで、日本の全体像を掴んでいます。それに対して日本人は、今もアメリカの占領政策のコップの中から脱出できないようです。

私はこれからアメリカの教科書と対比しながら、我が国史のクライマックスの部分を次々に紹介してゆきたいのですが、時間がありません。いきなり日露戦争に入ります。

世界各国に生きる日露戦争と東郷平八郎

現在の小・中・高校の教科書では、日露戦争を説明するにあたって与謝野晶子の

「君死にたもうことなかれ」をのせています。この護国神社には、旅順の戦いで戦死なさった方も多いそうですね。乃木將軍率いる第三軍は、あの難攻不落といわれた旅順要塞を落すべく屍山血河をもとめせず、勇猛果敢に戦ってついに陥落させた。その旅順の戦いを書くにあたり、今の教科書は次のように書いています。「日露戦争の時、与謝野晶子は中国の旅順で戦っている弟の身上を思って、上のような詩を作りました。日本軍はロシア軍の堅固な要塞に総攻撃を繰り返しましたが、死傷者が増えるばかりでなかなか落ちません。そんな最中に、この詩が発表されました。」と書いて、旅順が陥落したとは書いてないんです。そして乃木將軍も出てきません。与謝野晶子しか出てこないのです。その頃の与謝野晶子は、二十三才で堺の菓子屋の娘だったのです。与謝野晶子では旅順は落ちません。そして「キリスト教徒の内村鑑三や、社会主義者の幸徳秋水らは、戦争反対を唱えました。」とあります。

戦後の教科書には乃木希典や東郷平八郎、そして大山巖や児玉源太郎も出てこず、戦争に反対した人ばかりで書いているのです。ところが、ここに映したのはフランスの教科書です。ここにのせた絵は、明治神宮聖徳記念絵画館にある奉天入場の絵で、大山巖を先頭に児玉源太郎・黒木参謀が描いてあります。私達にとって懐かしい有名な絵ですが、これをフランスの教科書がのせているのです。イギリスの教科書では、英国の国会図書館にある、バルチック艦隊が沈みつつある絵をのせて、「東郷平八郎提督は、T字戦法をとってバルチック艦隊を全滅させ、ネルソン提督以来の大勝利を収めた。」と書いています。

日本海海戦のような大勝利は、歴史上無かったのです。その時の日本の戦死者が約百六十名で、ロシア側の戦死者が約五千名です。日本の損害は僅かに水雷艇が三隻、波にのまれて沈んだだけで、ロシア側は、六隻程上海へ逃げ、三隻程ウラジオストック

に逃げこみました。空前の大勝利であり、野球でいえば完全試合です。今後再び訪れないといわれた感動の白露戦争ですから、各国は好意的にのせ、東郷や大山を取り上げています。又、トルコのイスタンブールには「東郷通り」があります。この写真が、イスタンブールに今もある「東郷通り」です。当時、トルコも大変興奮しました。トルコはロシアと十五・六回戦いましたが、全部負けていました。あの頃、日本が勝つとは世界の人々は誰も思わなかったのです。ロシアの領土は日本の六十倍、国家予算は十倍、鉄鋼生産能力も造船能力も十倍だったのです。あの大国ロシアをついに破ったのですから、アジアを始め世界各国が感激しました。トルコなどでは子供の名前に「トナゴ」や「ノギ」とつけ、「東郷通り」や「乃木通り」ができたのです。

またフィンランドでは、「東郷平八郎提督」というビールが飲まれています。ここに持ってきたのが、その「東郷ビール」です。どうしてこの「東郷ビール」がフィン

ランドで造られ、それが日本に輸入されるようになったのか、紹介したいと思います。日本・フィンランド友好協会の会長が佐藤文生氏（大分県・衆議院議員）です。私は昭和五十九年五月に佐藤氏からフィンランド産の「東郷ビール」を貰いました。その年の七月、私は『反日国家日本』という本を出しました。現在の日本は「反日国家」ではないのか。よってたかって日本の否定面ばかりを掘り起こしているのですから。そしてその本の表紙には「東郷ビール」のラベルを使いました。すると、ラベルが良い、一冊七百五十円の本でラベルが買えるとは安いものだと言って、皆喜んで買ってくれました。そうしたら、「名越さん、ラベルだけでなく本物のビールを輸入してくれ。」といわれたので、失われた大和魂をフィンランドから逆輸入することを考えたのです。そこで、海軍兵学校出身の室宏明氏（エフケー産業㈱社長）に頼み込んで、大量に輸入して貰いました。そうしたら、「名越さん、『東郷ビール』でうつつをぬ

かすな。『ビールは東郷、酒は乃木』でいこうではないか。」と梶山茂氏（長崎県・共立病院長）からいわれ、ついに「乃木之誉」という酒を造りました。乃木さんが那須に隠棲された時に飲まれていた清水が、今もなお「乃木清水」として渾渾と湧き出ており、その清水で造った酒が「乃木之誉」です。二本とも同じ大きさにしました。かくして『ビールは東郷、酒は乃木』となったのです。（笑）

日露戦争は、何といっても国力において十倍の敵に勝ったのです。私は大学の各部に「東郷ビール」を一本づつ寄付しました。そうすると部員は「東郷ビール」で乾杯します。勿体ないから、おちよこで乾杯です。彼らは、飲みほした空ビンを神棚や目立つ所に置いておきます。そして試合に行く前に「東郷ビール」に敬礼すると、大変靈驗あらたか。（笑）皆様方もこれを手に入れられて、ご家庭にお供えておかれたら、家内安全・国家鎮護に役立つ。（笑）「大輪」という会社が、私の『反日国家日本』

とビールと酒を美しい箱入り三点セットにして売り出しました。そうしたら、お中元やお歳暮また叙勲の引出物にしたり、それから選挙の時に違反にならないようにうまく使って、当選した人が出ました。(笑)これを貰ったら皆勇気が出ますよ、あれだけ世界を感動させたのだから。

私は今、世田谷区下馬五丁目に住んでいますが、六丁目に元フィンランド大使の小島大作氏が住んでおります。小島氏からこんな話を聞きました。フィンランド大使に就任して昭和四十二年五月二十七日がやってきました。すると地元の小学生在が、日の丸の小旗を持って大使館を訪れるのです。天皇誕生日はもう終わっているし、今日は何事かなと思っていたら、小学生達が、「今日は日本海海戦勝利の日ですね。おめでとございます。」と行って、かつての海軍記念日をフィンランドの小学生達が祝ってくれるのです。彼らのはあの感激を、子に伝え孫に伝え、ひ孫にまで伝えていっているのです。

どうしてそうなったのでしょうか。

それは明治三十七年十月十六日のことです。フィンランドの喉元を抑えていたバルチック艦隊が、いよいよ東郷平八郎提督率いる連合艦隊と雌雄を決すべく出港してゆくというので、フィンランドの人々は海岸べりに出て祈りました。「このバルチック艦隊が再び帰ってきませんように、しかし帰ってくるだろう。日本は旗艦『三笠』がイギリス製で、軍艦も造れない国だから勝てないだろう。でも、少しでも帰ってきませぬように。」と祈っていたところが、東郷平八郎提督率いる連合艦隊が木端微塵に打ち破ったものだから、うれしくてうれしくて、一週間飲み明かしたといえます。そして今も、「東郷ビール」を飲んでいます。

昭和五十九年に、「東郷ビール」を造っているビュニッキ社のムーベリー社長が来日しました。私達は、社長を東郷神社に案内しました。その時彼は「日本ではソ連

の言いなりになることを「フィンランド化」といつているが、それは大変な誤解だ。ソ連から色々脅しをかけられても、心の中では我々は断じてこれに屈服せず、今も『東郷ビール』を飲む。これが「フィンランド化」という意味だよ。日本こそ「フィンランド化」しているではないか。」と逆襲しました。それで今日私は、皆様方おひとりおひとりに、この「東郷ビール」を差し上げようかと思いましたが、今売り切れで缶ビールならあるというので、本日ここに少し持ってまいりました。缶ビールの方も中味は同じで、地下二百メートルの岩盤の中から噴き出たフィンランドの水で造ったビールです。今日は二十四本しかありませんが、これを飲まれたら缶だけでも、応接間の中央に飾っておかれると、家内安全に役立つこと必定であります。(笑)

私の大学は五月二十七日が創立記念日ですから、学生を前に日露戦争の話をやると、拍手大喝采です。今日は拍手がひとつも出ませんけどね。(笑 拍手) とにかく祖先

の心と日本人の誇りを教え、我らも「後に続くぞ」という使命感を持たせるのが教育であります。日本は明治以来、侵略に次ぐ侵略をし、戦争ばかりの暗い時代だったと教えていたら、「なんだ我々の親父やおじいさんは誰かに欺かれて戦争ばかりやらされたのか、哀れなものだ。」という印象しか残りません。これでは、良い子に育つ道理がありません。彼らにも、誇りと喜びを教えなければならぬのです。

私は、学生に対しては、明るく感動的に話をしますから、話が終ると拍手喝采で、「先生、その話は何処に書いてあるのか。」「何故今まで教えられなかったのか。」と、私の所におしつけて来るのです。私の研究室には「東郷ビール」と「乃木之誉」を常備していて、学生が来たら進呈しています。若者は本当の話をすると、皆喜ぶのです。

もう少しご紹介しますと、日本人は敗戦直後過去の栄光を否定し、世界三大記念艦

の随一だった三笠記念艦のマストが取り払われて、屑鉄として売られるような始末でした。三笠の甲板上に異物を建て、東郷司令長官室はキャバレーとなり、士官室はダンスホールに変わっていたのです。それを怒ったのが、アメリカ太平洋艦隊司令長官ニミッツです。東郷司令長官室がキャバレーになったことに激怒し、昭和三十三年三月号の『文芸春秋』に書きました。その原稿料は、三笠の復元に使ってくれといい、また別に東郷神社の再建に使ってくれといって、著書『太平洋海戦史』の印税とメッセージを東郷神社に送っています。ニミッツ元帥は東郷元帥を尊敬しており、帝国海軍を東郷元帥の精神をもって木端微塵に破ったといわれています。

ニミッツ元帥が死んでから、彼の郷里のテキサス州・フレデリックバーグにニミッツ歴史公園（ニミッツセンター）ができました。そしてそこには東郷記念室があり、東郷元帥とニミッツ元帥が、実際に会って握手している像などがあります。この写真の

様に、東郷書斎も建てられ、この書斎とニミッツ記念館の間には太平洋を表した枯山水の庭園があります。アメリカの新聞は、大々的にこのことを紹介していますが、日本の新聞はあまり報道しませんでした。ニミッツセンターで売られているパンフレットには、この写真のように東郷元帥を上、ニミッツ元帥を下にのせています。このようにアメリカは「世界の東郷」に敬意を表わしているのです。

もう一つ紹介しておきます。『東郷さんを偲ぶ会』が昭和六十年に、日露戦勝八十年を記念して挙行されました。日教組に加入していない中学校の先生方が世話をし、参加者千五百人が、船橋市の「ららぽーと劇場」に集まりました。その時に来賓として出席したトルコ大使は、「自分は小学校の時、教科書で東郷さんのことを学びました。それ以来、東郷さんを尊敬しております。トルコが独立出来たのは、日露戦争のお陰です。そして日露戦争を勝利に導いたのは、日本の皆様方は東郷元帥や乃木將軍や大

山元帥といわれますが、そうではなくて明治天皇であられます。なんとすれば、彼らは天皇の御稜威によって、勝たせてもらったといっているのではないか。だから私は毎朝、明治神宮に参拝しています。」と挨拶しました。

主催者から、閉会の辞を私にやって欲しい、又、最後は「聖寿万歳」で締めて貰いたい、といわれました。「私は聖寿万歳をやったら東京へ帰ってしまうからいいけれど、今日参加した人達の中には日教組の人も大勢いるのではないか。そんな中でやってもいいのか。」といったら、「まず全員を心から『聖寿万歳』ができる様な雰囲気作りをしてください。それができなかつたら、やらなくてもよろしいから。」と。私は責任を負わされて、考えました。その時、こういうような言い方をしたので。「皆様、本日はトルコ大使のご臨席を仰ぎ、海上自衛隊軍楽隊による明治以来の日本の名曲の演奏、そして江藤淳先生の日本海海戦の息詰まるようなご講演を頂き、日本人として最高の

喜びを味わいました。日本人が、最大の感激を味わった時に絶唱する六つの文字があるのです。日本三千年の歴史を一言で表わせば、この六文字をもって言い尽せます。その六文字を、皆様と共に絶唱したいと思いますが、ご異議はないでしょうか。」と言ったら、「いいぞ」「やれやれ」という言葉が返ってきました。私は「それでは、やらせていただきます。全員ご起立をお願いします。」といて「天皇陛下万歳」を先導しました。会場が割れんばかりの「天皇陛下万歳」でした。

それが終わったら、トルコ大使が私の所へつかつかと近づいてきて、握手を求めました。「私は日本語はわからないから、あなたの言うことはよくわからなかったが、実は全部わかった。現代はぶったるんでいるからプッシュしなければならぬ。名越さん頑張ってください。」といい、拳を前に突き出して「プッシュ」「プッシュ」を連発したのでした。トルコ大使は、サムライですね。

戦争の責任は、日本と米英のどちらにあったか

これからいよいよ「大東亜戦争の巻」に移ります。戦争を語るにあたって、戦後は「戦争責任」の問題がずっと尾を引いてきました。戦争の責任は天皇にあったと主張すれば、いや責任は当時の軍部や指導者にあったとして反駁しています。そもそもあの戦争は総力戦であって、天皇も軍人も国民も、一億が火の玉となって戦ったのはありませんか。そのことを忘れて、天皇か軍部かで、蝸牛角上の争いをしているのです。

第一、大東亜戦争は、日本と米・英の間で戦われたのです。戦争を語るとすれば、開戦の責任は日本にあったか、米・英にあったかで議論しなければならないのに、天皇か軍部か、で内輪喧嘩をしているのです。これでは子供の喧嘩で、マッカーサーも

地下で「やっぱり日本人は十二歳の子供だ。」と笑っているに違いありません。

現在の日本人は極東裁判史観から解放されず、対等なものを見る目を失っているのです。東條英機元首相は、巢鴨に拘置された時、「裁判を行うのであれば、阿片戦争までさかのぼってやるべきだ。」と言っていました。また結核で瘦せ衰えた松岡洋右元外相は、キーンナン検事から「何か言い残すことはないか？」と訊かれた時、「アングロサクソンほどの大ウソツキはない。外交官として、たった一度でいいから、アングロサクソンのような大ウソをついてから死にたい。」と啖呵をきりました。

二度と戦争を起こさないために、公平な裁判をやるのであれば、せめて中立国のスイスあたりから裁判長を出し、被告席には戦争をやった日本と米英双方の指導者を登場させ、大論戦を戦わせていたら、その後の歴史にも大きな教訓を残したであろうと思われれます。

その点、現在使われている米英の教科書は比較的公正な処があります。ここに映し出したのは、米英の教科書に必ずのっている歴史地図です。一九一四年のアジアの地図ですが、国別に色分けしているので、よく解ります。この地図を見ておれば、歴史を学ばなくても、その頃アジア太平洋地域がいかに欧米諸国によって侵略されていたかが、一目瞭然です。イギリスはインドとビルマ・マレーシア・シンガポール・ブルネイ、そしてオーストラリア・ニュージーランドに至る太平洋諸地域を植民地にしていました。フランスがカンボジア・ラオス・ベトナムを、オランダがインドネシア、アメリカがフィリピンを植民地にし、更にシナ大陸の要所は、イギリス・ドイツ・ロシア等が租界地を作って支配していました。当時、アジアにおいて確固たる独立国は日本だけでした。誇り高き大日本帝国国民は、あの頃、アジアに対して責任を感じていたのです。日本が崩れたらどうなるか、アジアは永久に彼らの植民地として奴隷となつてし

まいます。これが共通した日本国民の意志でした。それに対して、米英は老獪な外交的手段をもって、日本に圧力を加えてきました。

ワシントン・ロンドン条約で、五・五・三の比率を押しつけ、満州事変が起これば国際連盟を舞台に日本の孤立をはかり、支那事変では仏印ルート・ビルマルトを通じて公然と蒋介石政権を援助し続けました。昭和十四年には、一方的に日米通商航海条約を破棄して、事実上の対日経済戦争を仕掛けてきました。ヨーロッパや太平洋の彼方から、なぜかくもアジアに干渉してくるのか。当時の日本人は彼らに対して、民族的憤激を醸成していったのです。

日本が仏印に進駐すると、A B C D 包囲陣を作つて、日本の海外資産を凍結し、石油その他の禁輸を断行しました。実はそれ以前に、英はアイスランドに、米はグリーンランドに進駐しています。更に、ソ連はずっと以前にモンゴルを衛星国にし、フィン

ランド・ポーランド・バルト三国を侵略しています。彼らは自分がやった侵略行為を棚にあげて、日本だけを圧迫してきたのです。

それでも陛下は外交交渉を優先され、東條内閣に対し、これまでの「開戦を辞さず」とする決定を白紙に戻して、日米交渉をやり直すように指示されました。東條内閣は甲案・乙案を用意して真剣に取り組みました。ルーズベルトも開戦の準備ができるまで、「日本をあやしておく」必要を認め、一時は乙案の線ではぼまとりかけていました。しかし、それを知った蒋介石は、チャーチルにも働きかけ、猛反対をやりました。このことは『蒋介石秘録』に誇らしげに書いております。そして突如、運命のハル・ノート突きつけたのです。

このハル・ノートというのは、シナ大陸のみならず、満州からも徹兵しろという内容が含まれており、パール判事も「ここまで追い込まれたらモナコやルクセンブルク

のような国でも、銃を取って立ちあがったであろう。」と述べたほどであります。もしあの時、「戦争はいやだ」といって彼らのいいなりになっていたら、今度は朝鮮から手を引け、台湾を手放せと次々に難題を押しつけ、あげくの果ては、横浜や神戸その他に租界地を作らせると迫ってくるでしょう。誇り高き日本民族は、彼らの奴隷になるより、銃を取って立ちあがったのです。「斯ノ如クニシテ推移セムカ、東亜安定ニ関スル帝国積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ帰シ、帝国ノ存在立亦ニ危始ニ瀕セリ。事既ニ此ニ至ル。帝国ハ今ヤ自在自衛ノ為蹶然起ツテ、一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ。」というのが、宣戦の詔書の主題でした。この詔書に従って一億国民は、身を鴻毛の軽きに比して戦ったのです。そして最後は特攻隊を繰り出し、太平洋の島々で玉碎し、壮絶無比な戦いを敢行したのです。これが歴史的事実であり、このことを踏まえなければ、日本民族のそのようなエネルギーの爆発は説明できないのです。

イギリスの東南アジア司令官であったマウントバットン卿は、「日本人の勇敢さが長い間理解できなかったが、アジアから欧米勢力を追い払う為であったことを知って、初めて納得した。」と述べていますが、好き好んで戦争したのでは断じてなかったのです。当時の日本民族の悲願を無視して、日本だけを犯罪国家のように見たのでは、英霊に対して申し分けないではありませんか。

支那事変は侵略戦争か

このように語れば、なるほど大東亜戦争には東亜解放という理があったが、支那事変は侵略ではないかと思われるかもしれません。しかし、はっきりさせておかねばならないことは、当時、支那事変を侵略だと思って戦った日本人は、一人もいなかったという事です。当時のシナは、排日悔日教育の運動が盛んで、日本を「東洋鬼」と呼び、

現地日本人に暴虐を加えてきました。蘆溝橋一発の銃声から始まった訳ですが、事態を收拾しようとすれば不穩の事態が次々と発生し、心ならずも戦線が拡大しました。そこには、張りめぐらされたコミンテルン人民解放戦線組織の、巧妙な謀略が働いていました。中国共産党としては、日本と蒋介石政権を奔命に疲れさせる狙いがあったのです。戦線が拡大すれば、愛国意識が全土に燃え上りました。私がシナ人であつたら、日本軍の「侵略」に対して銃を取っていたでしょう。中国側が日本軍を侵略と見るのは当然であります。

それに対し日本はどうであったか。断じて侵略したのではなかったのです。日本の目的は何であったか。それは、米英の手先となり、ソ連とも手を結んで現地日本人に暴虐を働く蒋介石政権を膺徴（こらしめる）し、反省を促す戦争であったのです。日本は領土も取らない、賠償金も要求しないから、「聖戦」と信じて戦ったのです。英

霊も、聖戦なればこそ命を捧げたのです。

ひとつだけ例を挙げましょう。昭和十五年二月二日、衆院本会議で斉藤隆夫議員が、「一度戦争となれば徹頭徹尾力の争いであり、弱者に対する征服である。『東洋永遠の平和』とか『聖戦』とかいう空虚な偽善をやめて、早く解決せよ。」と大演説をぶちました。するとそれは「聖戦誹謗」だとして、賛成二九六・反対七の絶対多数で除名処分にされてしまいました。善いか悪いかは別にして、これがその頃の日本の世論であり時代風潮であったのです。このように双方の立場を対等に見ることによって支那事変の性格も判るのです。

ここでアメリカの『近代日本の形成』という大学用教科書を紹介してみましよう。「その頃、蒋介石は米英の援助をうけ、ソ連とも手を結び、アジアの攪乱を図った。それに対し日本は、日滿支一体となった東亜新秩序の建設を図ろうとした。」と両方

の立場をそのまま書いて、どちらが侵略であったのかということは書いてないのです。勿論、南京大虐殺も書いてありません。それどころか、南京が陥落して、女学生が皇居前で日の丸を振っている写真をのせています。これが双方の立場をふまえた支那事変のとらえ方です。

それに対して日本の教科書は、小・中・高を通してどれも南京大虐殺をとりあげ、「侵略」用語が頻発しています。ここにお目にかけるのは、ある出版社が出している「歴史的分野」（文部省検定済）の教科書です。

この教科書は見出しから「日本の侵略」となっており、本文でも華北侵略・中国侵略・中国北部の侵略というように、たった一頁の中に、侵略という言葉が六ヶ所も出てきます。日本は侵略したと書いておけば安心だ、日本のマスコミや中共や韓国からも文句をいわれないからという雰囲気があり、教科書会社は皆、侵略用語を頻出させ

ています。それに文部省は、中共や韓国のみならず、日本の外務省からも圧力がかかるので、近現代史については検定を放棄したに等しい状態になりました。

だからといって、私は支那事変を肯定せよといっているのではないのです。批判は別の「評論」でやればよいのです。私も、支那事変の批判ならいくらもいいたいことがあります。しかし、歴史は批判ではなく、事実関係を扱うべきです。歴史を善玉悪玉論で語るのには、子供だましになります。双方の立場を公平に見なければ、戦乱の原因が説明できないではありませんか。

忘れてはならない日本の戦友・汪兆銘一門

そして、支那事変を語る時に我々が忘れてはならないのが、汪兆銘一門の事です。今日は名古屋に近い三重県に来たので、ご紹介したいと思います。

『諸君！』の六十三年六月号に、汪兆銘について譚覚真氏と江藤淳氏の対談がのっておりましてので、お読みになったと思いますが、汪兆銘は日本と手を握る事によってアジアの安定を図ろうとし、反共親日和平路線を歩んだ人なのです。それに対して蒋介石は、容共親米英反日戦争路線を歩んだのです。

汪兆銘は不治の病にかかって、昭和十九年十一月十日、名古屋大学病院で亡くなりました。汪兆銘を看護していた妻・陳璧君は、汪兆銘の遺体を孫文の眠る南京の中山陵のほとりに葬る前に、汪兆銘の忘れ形見として梅の木三本を、名古屋大学病院の庭に植えました。その梅の木三本のうち一本枯れて、二本は今も残っています。南京に建てた汪兆銘の墓は、戦後蒋介石によって破壊され、汪兆銘一門五十数名は、銃殺刑に処せられ墓はありません。今、汪兆銘を偲ぶよすがは、僅かに名古屋大学病院の梅の木二本だけとなりました。

又、汪兆銘の後を継いだ陳公博、彼は蘇州で銃殺されたのですが、吉田松陰のような立派な最後を遂げています。妻陳壁君は女性ゆえに処刑されませんでした。裁判にあたり彼女は何と言ったかというところ、「夫、汪兆銘を民族の裏切り者のようにいうが、蒋介石は米英の手先ではないか、毛沢東はソ連の手先ではないか。誰が民族の為に尽したか、歴史だけが知っているであろう。」と烈烈たる演説をしています。彼女は終身刑を言い渡され、昭和三十六年北京の監獄で（糖尿病）亡くなりましたが、亡くなる前に北京政府が彼女に「あなたの娘が今香港に亡命しているそうだが、最期を見とらせてあげましょうか。」といったら、「自分は革命家の妻らしく一人で死んでゆきたい。自分の娘が来たら女々しい事をいうかもしれない。」と断り、一人で死んでゆきました。遺言により、彼女の遺体は東支那海に流しましたが、海に入っても抵抗を続けようとしたのか、日中永遠の掛橋となろうとしたのか。日本を裏切らず、日本と手を結んで東亜新秩序の建設を図ろうとした汪兆銘一門の壮絶な最後を、我々は忘れてはならないのです。

戦後、右の人は蒋介石に頭があがらず、左の人は毛沢東に頭があがらないのですが、日本を裏切らなかったアジアの戦友達がいたことを、日本を愛する国民であるならば、忘れてはなりません。しかも汪兆銘は、三重県からも近い名古屋大学病院で息を引取り、その病院の中庭には形見の梅の木が今も残っているのです。思えば、日本と手を結んだアジアの指導者達は、それぞれ悲劇的な最後を遂げております。終戦の詔書でも天皇陛下はいつておられます、「東亜解放に協力せる諸盟邦を思えば、遺憾の意を表せざるを得ず。」と。我々が遺憾の意を表するのは、日本と共に戦った戦友達に対してであって、アメリカや中共にお詫びをする事ではない、これが終戦の詔書精神であります。

インパール作戦の歴史的意義とチャンドラ・ボースの復権

時間がだんだん少なくなりましたので、私が取材した「アジアに生きる大東亜戦争の遺産」の中から、印象的なものをいくつかご紹介したいと思います。

三重県護国神社に祀られている御祭神の中には、インパール作戦で亡くなられた方々がかなりおられると、先程伺いました。インパール作戦は、戦後日本では大東亜戦争三大愚戦のひとつといわれておりますが、私がインドへ行きましたら、案内人からインパール作戦ほど大東亜戦争らしい作戦はない、この作戦のお蔭でインドは独立できたのだと聞きました。

現在インドで、「スプリング・タイガー（俊敏なる虎）」と仇名されている英傑チャンドラ・ボースですが、ドイツから潜水艦を乗りついで日本にやって来ました。そし

て、シンガポールでインド国民軍を組織して、インパール作戦に参加したのです。あの時、チャンドラ・ボースは「アラカン山脈を越えるのは愚策である。カルカタに敵前上陸をせよ。」と提案したのですが、当時日本に制海権・制空権なく、ついにインパール作戦をやって日本は惨憺たる敗北をして、実に多くの犠牲者を出しました。インパールの悲劇を思うと涙なくして語れませんが、しかし、インパールに独立の旗をなびかしたことで、戦後、インドに独立の波が広がり、インド四億の民が独立に立ち挙げりました。大インドが独立すると、その波はアフリカまで広がっていき、歴史の大転換を果したわけです。チャンドラ・ボースは昭和二十年八月十七日、台北で事故死しましたが、今、チャンドラ・ボースとインド国民軍の巨大な銅像はデリーの真中で、イギリス植民地の牙城レッドフォードをにらんで立っております。この像を仰ぎながら、チャンドラ・ボースも国民軍もインドに凱旋したとインド人はいいます。

日本の戦友は、インドではチャンドラ・ボース、ビルマではバー・モウ、フィリピンではラウエル、インドネシアではスカルノと、それぞれ復権しています。特に、チャンドラ・ボースやスカルノの復権は見事でした。日本人は、インドの仏跡参拝に行っても、チャンドラ・ボースの銅像は見ずに帰るのです。何をしにインドまで行ったのかと思います。大事な所をひとつも見ないで、海外旅行に行っているのです。インドに行かれた人は、ここに映し出したチャンドラ・ボースの記念切手をお買いになられたでしょうか。切手のみならず、インドでは、街のあちこちで、チャンドラ・ボースの本が売られております。私は荷物になるので薄いものだけ十数種類ほどを買ってまいりました。

また日本の遺族青年団がインパールの近くのモイランに遺骨収集に行った時には、「インドが独立出来たのは日本のお蔭だから遺骨収集に協力する。」と行って、チャンドラ・ボースの銅像の周りに、現地の人々が大勢集まりました。

インドの国会議事堂に行きますと、三人の英傑の写真が飾られています。真中がチャンドラ・ボース、右がガンジー、左がネールです。私が現地の青年に、チャンドラ・ボースとネールとどちらが偉いかと訊きましたら、「それはチャンドラ・ボースだ。チャンドラ・ボースはインド独立に命を賭けた。ネールは総理大臣になりたかっただけの男だよ。」と書いていました。だから日本でいうと、チャンドラ・ボースは西郷隆盛で、ネールは大久保利通というところですよ。

それから私達が忘れてならないのが、プラタップというインドの国会議員の事です。彼は国会議員になってから、「東南アジア諸国が日本に賠償金を請求するとは何事だ。我ら東南アジア諸国民こそ日本に賠償金を払うべきではないか。日本は植民地一掃の為にあれだけ大勢の戦死者を出して、戦後経済的にも困っている。我々こそ日

本に賠償金を払おうではないか。」という運動を起こしてくれた人です。その他にも、ビルマのタキン・バ・セインという人は、「百年の永きに亘り、植民地にしていたイギリスから賠償金を取り、そしてその賠償金を日本に払うべきだ。」という意見を持っていました。これと同じような意見の人は他にもあり、今回の東南アジア旅行で会ってまいりました。

インドネシアに生きる大東亜戦争の遺産

日本は大東亜戦争において、日本歴史始まって以来の民族のエネルギーを結集しました。僅か四年足らずの短い期間でしたが、それがいかに大きなインパクトを与えたか、アジア各地を訪ねてみると、そのスケールの大きさに驚嘆させられます。そしてどこにも尊い遺産が生きております。それはまさに先輩が後代に遺した歴史の宝庫ではないかと思われるのです。これを正しく活かすことが、アジア諸国との交流の前提であり、また外交の基本に据えるべきものではないかと思うのです。

にも拘らず、現在日本では、大東亜戦争は愚かなる選択であり、アジア諸国に迷惑をかけた、という前提でものを考えるようになりました。そのため日本の政治家がインドネシアに行けば、「過ぐる大戦に於て、我が国は貴国に対しご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。」と、最初に挨拶をするんです。スハルト大統領を始め、戦後インドネシアを築いた政治家達は、ベタ（祖国防衛義勇軍）の訓練所で、日本の教育を徹底して受け、魂を吹き込まれて、戦後オランダに対し独立戦を試み、日本軍人約千人も志願して共に戦ったのです。日本の支援なくして、独立は考えられなかったのです。彼らは心の底でそのことをよく知っています。

昭和六十一年の夏、私がインドネシアに行って会ったサンバス氏（当時六十五歳・

元復員大臣)は、切々として訴えました。「今、インドネシア人の中にも、またその他の国の人の中にも、大東亜戦争で日本の憲兵隊が弾圧したとか、多数の労務者を駆使したとか、住民を虐待したとかいう人があるが、そんなことは小さな問題だ。いかなる戦場でも起り得ることだし、何千年前もそうだったし、今後もそうだ。日本がやった基本的なこと、即ち最も大きな貢献は、我々に独立心をかきたててくれたことだ。そして我々に厳しい訓練を課してくれた。これはオランダの思いに及ばぬことだ。日本人はインドネシア人と同じように苦勞し、同じように汗を流してくれた。そして、独立はどんなにして勝ちとするものかを教えてくれた。これはいかに感謝しても、感謝し過ぎることはない。これはペタの訓練を受けた者が、残らず感じていることなんだ。」と。

しかし皆さん、インドネシア人がこんなに言ってくれたからといって、我々日本人は、「日本のお蔭でインドネシアは独立できた」などと、口外すべきではありません。心中深く英霊の御加護として、合掌すべきであります。日本人としては、「日本のやったことを評価して頂いて有難い。こういう言葉を聞けば、戦死した英霊たちも、心が安まると思う。しかし、独立は他国の力で実現できるものではない。自らの意志を奮い起こして困難な戦いを続けられたインドネシアに対し、心からの敬意を表する。」と、挨拶するべきではありませんか。

ところが最近の日本の政治家は、アジア諸国に行けば一様に「ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。」と、自国の尽した業績を否定するてあいが多いのです。民族の運命をかけて戦ったあの大战を侵略視する総理大臣がおります。自国の歴史を否定する首相が何処にいますか。日本には日本の正義があったからこそ、あれだけ戦えたのです。当時日本人の中で、侵略戦争のつもりで戦った者が一人としておりまし

たか？護国の英霊は、侵略戦争に参加されたのですか？断じて否でしょう。この事は明確な歴史的事実だから、日本人として否定したら、現地の良識ある政治家に笑われるのです。よく政治家の通訳を担当する中島慎三郎氏（ASEANセンター理事長）は、そのことを知っているから、通訳する時、次のようにいい直すそうです。「過ぐる大戦に於て、我国は戦いに破れて、貴国の期待にこたえることができず、申し訳けありませんでした。」と。

バリの父・三浦襄翁の自決

日本軍がインドネシアに上陸したのが、昭和十七年三月十日。現地住民は歓呼して迎え、住民全部が味方したので、三百五十年間植民地にしてきたオランダ軍は、僅か十日で降伏してしまいました。その後日本人は現地人を教育し組織し、スカルノ・ハ

ッタは敗戦後の八月十七日独立宣言を発しました。その後、多数の日本人が独立戦争に参加しただけに、感動の美談が各地に沢山残っています。

ここでは一っだけ触れさせていただきます。ジャワ島の東にバリ島があり、今は、「地上最後の楽園」のキャッチフレーズにひかれて、日本の若者が出かけてサーフィンを楽しんだりしています。ところが、そのバリ島には、三浦襄という日本人として忘れてならない人が眠っているのです。この人はクリスチャンで仙台の人ですが、昭和二十年に敗戦を迎えて、バリ島二十数箇所を演説して回りました。「我々はインドネシアの独立を約束していたが、戦いに敗れ申し訳なかった。後は皆様方の努力で頑張ってください。その代りに自分はインドネシアの人柱になる。」と予告し、九月七日の早朝、皆が三浦氏の自決を警戒している中、自分で墓穴を掘り、棺桶まで用意して自決しました。その三浦氏は「パパバリ」バリの父として今も慕われ、デン

バザールには立派なお墓もできています。そのお墓には、「三浦襄は二六〇五年九月七日に亡くなった」と、インドネシア語で刻まれています。二六〇五年というのは、皇紀二千六百五年、即ち昭和二十年ということなのです。インドネシアの独立宣言書にも皇紀が使われ、バリ島で売っているカレンダーの中にも、皇紀を使ったカレンダーがあります。インドネシアには神武紀元が生きているんですね。

バリ島にあれ程大勢の日本人が行きながら、三浦襄翁のお墓があることも、またインドネシアの独立戦争に戦死した十二人の日本人が、英雄墓地に祀られている事も知らない。教える人もなく、ガイドブックにも書かれていません。

バリ島ばかりではありません。東南アジア各地に大東亜戦争の遺産は残っているのです。早く行って、生き証人に会って話を聞いておかなければ、やがて消えてしまうことを恐れるのです。

マレーシアの元外務大臣・ガザリー氏

―現地反日感情のカラクリ―

もう一つ、マレーシアについて触れさせて下さい。

先日、現在衆議院議員で、かつて大臣までやったP氏が、来日したマレーシアの元外務大臣ガザリー氏に会いました。ガザリー氏はアセアンをつくった大物で、ハマールシールド賞をもらった人です。その時にP氏は「過ぐる大戦に於て、我が国は…」とやったわけです。そうしたらガザリー氏が、「どうしてそんな挨拶をするのですか。マレーシアが独立できたのは、日本があのでイギリスを追い払ったからではないですか。日本の大東亜戦争は立派な事をやったではないですか。それをどうして悪いことをやったようにいいますか。」とたしなめたのです。特にこの護国神社には、マレーシア

からシンガポール攻略作戦に参加された方も多いそうですが、東亜侵略百年の牙城シンガポールを陥落させた作戦に、アジア諸民族がいかに感動したか、あれは世界を転換させた瞬間であったのです。イギリスは遂に奪還できなかったではありませんか。私も側についてガザリー氏に、「どうも日本は、マスコミから学界から政治家から恥かし次第です。」といいました。そうしたら彼は、「自動車は前をしっかり見て運転しなければならぬのに、どうも日本人はバックミラーばかり見ているようだ。私は威張る人は嫌いだ、ペコペコする人も嫌いだ。」とっていました。

東南アジアの政治家は独立戦争をやっているから、日本の明治維新の志士のようにスケールが大きいのです。苦勞しているだけに、日本の果した役割を正しく評価します。にも拘らず、現在マスコミを通して日本にもたらされる情報は、反日感情の面ばかりです。どうしてそうなるのか？ それは現地のマスコミを握った華僑の仕業なので

す。容共華僑と日本の大マスコミとが連動して、反日的ムードを作りあげているのです。決して現地人は反日ではなく、日本がイギリスやオランダを追い出してくれたから独立できた、というのが共通した受け止め方なのです。それに我が国は大変な経済発展を遂げ、現地には日本商品が溢れ、多数の経済援助が行なわれています。そのため対日意識もすっかり変りつつあるようです。かつて反日感情が強かったシンガポールも、「ルック・イースト、日本に学べ」運動を展開している程です。時間があれば、このへんの事情についても詳しくスライドをお目にかけるながら紹介する予定だったのですが、時間配分がうまくゆかず、申し分けありません。

ま と め

靖国精神が平和を守る

現在の日本は、平和、平和の大合唱の感があります。「平和通り」「平和国家」「平和憲法」「平和都市宣言」というように、「平和」を念仏のように唱えています。平和の実内容がなく「戦争は嫌だ」「いかなる戦争も反対」といっておれば、平和が守れるような錯覚を起こしています。私の大学の近くに住んでいるドイツ新聞のH氏が、二・三年前に私に漏らしたことがあります。

「日本の教科書には、国を守るとい言葉がない。日本の平和論は結局降伏論ではないのか。これでは自国が攻められたら、戦争が嫌だから降伏するよ、と外国に訴えているようなものではないのか。豚のように肥えて骨のない経済大国だから、いざと

なったら一番に攻め込まれる。よほど戦争が好きで、攻めて貰いたい人が多いらしい。国際関係のバランスが崩れたら、一番先に巻き込まれるのが日本だと思う。日本の新聞は中曽根をタカ派だと書いているが、世界で一番ハト派ではないのか。不沈空母だといっているが、日本は泥舟に乗っているようなものだ。世界の首相の中で公然と、非核三原則を守りますといっている者がどこにあるか。せめて『造らず持たず』の非核二原則にして、持ち込ませているかもしれない、と思わせておくのが防衛の常識ではないのか。フランスのミッテラン大統領は社会党だが、彼でさえ就任と同時に核実験を強行したではないか。」

H氏は、日本で本音を吐いたらすぐレッテルを貼られて取材しにくくなるから、本名をいわないように頼まれているので、イニシャルで紹介した訳ですが、国際情勢に明るい特派員あたりの、これが常識なのです。それでは日本の平和を守るにはどう

したらよいのか。

それは護国の神々の心を教えることです。人の命は地球より重いいわれませんが、御英霊は地球より重い命を、「鴻毛の軽きに比して」祖国防衛の為に捧げられたのです。祖国が危機に遭遇すれば、我々も先輩の後に続いて銃を取るぞと、愛国心を奮い起こすのが、教育ではありませんまいか。若者に忠勇武烈な愛国物語を教えて、彼らに目標を与え、感動を教え、使命感に燃えさせることによって、教育の荒廃も根治されるわけではありませんまいか。日本をとりまく諸国も、うっかり日本を攻撃したら、ベトナムやアフガニスタンの二の舞になるかも知れないと思わせておけば、日本の独立と安全と平和が守れるのです。国際化時代を強調するならば、まずこの点に気付いて欲しいのです。

大変まとまらない話になりましたが、最後まで熱心にご傾聴下さいまして、誠にあ

りがとうございました。(拍手)



後記

名越 二荒之助

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

この講演記録は、昭和六十三年八月四日、三重県護国神社奉賛会に招かれ、午後一時から三時半まで二時間半に及んだ速記録を元にまとめたものです。その時の講演は、私の作ったスライド百五十枚を、大きなスクリーンに映し出しながら語りました。実物写真と解説とが一体となった、いわば「スライド講演」でした。最近ではスライドを使って講演しているので各地から、一冊の本にまとめるよう依頼されてきました。しかし、写真も講演も同時に紹介することになるとややこしく、匙を投げていました。ところが此度、伊藤智様（三重県護国神社奉賛会事務局）が苦心して、言葉だけで臨

場感を出せるようにまとめて下さいました。そして奉賛会が、『講演集 第二輯』として出版して下さったのです。ありがたく厚く御礼申し上げます。

そもそも講演というものは、全体にキメが荒く、資料の裏付けも乏しいものになりがちです。特に私の場合はいつも欲張り過ぎて、早口でまくしたてています。だからこの小冊子を読まれた読者にもいろいろ疑問が出てくるものと思われれます。その方は拙著『ドキュメント・世界に生きる日本の心』『アジアに生きる大東亜戦争』（いづれも東京都台東区東上野四一―五 展転社）を参照頂ければ幸いです。写真も約四百五十枚を使って、詳しく解説しています。

そしてここでもう一つ報告させて頂きます。私が講演の冒頭で紹介したパラオの国旗ですが、終了後多数の方々が購入し、署名もして頂きました。その他全国各地からも支援を頂きましたので、昭和六十三年十二月十六日、有志二十七名と共に、パラオ

共和国を訪問しました。ペリリュー・アンガウルの玉碎島を訪ね、戦跡参拝と現地住民との交歓会を持ちました。十九日には、コロールにある大統領官邸を訪ね、トマス大統領に署名簿十一冊と共に、次のような品を奉呈しました。

- | | |
|------------|--------|
| 一、現金 | 三〇〇〇ドル |
| 二、日本語教習用絵本 | 百冊 |
| 三、野球道具 | 十六組 |
| 四、バスケットボール | 六十個 |
| 五、日本語辞典 | 五冊 |
| 六、携帯用冷蔵庫 | 一個 |

私がこれらの品は量は少ないけれど、パラオに捧げる日本人の真心の結晶である旨

を述べると、大統領は立ちあがって、次のように答えました。

「日本とパラオは、戦争前も戦後も友好関係に結ばれていました。日本は太平洋に面し、パラオは太平洋の真中にある太平洋国家同志です。パラオは人口も少なく、小さな国で、独立国家としても充分とはいえません。日本からいろいろ経済援助を受けている状態です。本日はその日本から、沢山の土産を持って、パラオを訪ねて下さって、感謝に堪えません。しかし本日訪ねられた日本の方々は、これまでの日本人とは違うように思います。我々に「心」を持って来て下さった。そもそも外交は「心」が基本です。パラオと日本は深い友好関係を築いてゆきたいと思います。」

この大統領の挨拶は、島民すべての心を代弁しているように思われました。我々はペリリュー・アンガウル・コロールでも、交歓のセレモニーを持ちましたが、それぞ

れの島の大酋長が述べた挨拶は、いずれも大統領の言葉と軌を一にしていました。報告を終るにあたって、オキシマ・トヨミ女史の言葉を紹介しておきます。我々は日本語教習用の絵本百冊を持参したのですが、それに対して女史は次のように述べました。

「私はパラオの若い人達に日本語を勉強させたいと思って、日本に行った時、絵本を捜しました。日本の心もあわせ教えたいと思っていました。ところが教育勅語の精神が盛られたような絵本はありませんでした。アメリカには聖書の絵本が沢山あります。日本の教育勅語は聖書のエキスを短くまとめたものです。教育勅語の絵本が欲しいですね。」

私は帰国してすぐこのことを仏所護念会教団の関口孝氏に伝えました。すると、それにピッタリの絵本が「日本を守る会」から『十二のちかい』教育勅語から』と題

して出版されているといわれます。事務所に聞いたら現在絶版の由。来年は教育勅語御下賜百年にあたるのですが……………。

(平成元年二月二十四日 記)

奉賛会講演集 第二輯

平成元年五月二十五日発行

発行者 三重県護国神社奉賛会

〒514 津市広明町三八七番地
三重県護国神社内